

景徐周麟の湯山湯治とその温泉文学

武穎（名古屋大学・人文学研究科）

1. はじめに

五山文学後期の代表作家である景徐周麟（1440—1518）は「中風」、「寒疾」などの疾患により、明応2年、明応4年、明応9年、文亀4年（永正元年）と四回湯山温泉（現在神戸市有馬温泉）で療養した。彼の作品には温泉関連のものが多く、これらの作品は主に『翰林葫蘆集』に収録される一方、寿春妙永との「湯山聯句」にも反映されている。その中、温泉地における生活の描写もさることながら、それで思い浮かべる故事や典故が多く見られる一方、湯治とともにいろいろ世相や、自身の生き方、さらに悟道について考えた内容も窺え、温泉をまつわり、一つの特徴がある文学作品群をなしている。本発表は、景徐周麟の温泉文学に主に主眼を置き、彼の湯山温泉地における見聞や、その作品から見られる文学特徴、思想を探りたい。

2. 景徐周麟の湯山湯治

景徐周麟は延徳年間から「中風」、「寒疾」などの持病を抱えはじめ、明応2年には、湯山温泉へ湯治に赴いた。当時の作品「温泉十題」には「昔聞薬師求薬」「花邊温泉古梵宮 病僧浴罷立春風 人々芝桂與參木 收入醫王藥籠中」の詩があり、入浴の事情を描き、温泉の薬用機能を称えた。また、明応4年（1495）になると、二回目の湯山湯治を行い、「前度衰僧今又來」、「咲吾三七強調養 齒髮依然日夜催」（温泉口号）などの詩句から見ると、体調が前よりも悪くなったことが読み取れる。さらに、明応9年正月になると、中風になり、「来月入温湯、以養老身則可也」（『鹿苑日録』明応9年正月18日条）と、遣明正使の任命を拒否し、ようやく当年の4月29日に湯山へ出発した。「湯山聯句」にある「登科今睡漢、住院昨僧官」などの句でわかったように、景徐周麟は湯山湯治をきっかけに鹿苑院から退院し、僧官の身分ではなくなることがわかった。なお、文亀4年（永正元年）（1504）には、64歳になった景徐周麟は再度湯山で湯治し、「湯泉」「開關湯山甲接津 温於陰谷黍生春 寒離暖附君休笑 不是三冬枯木身」という詩において湯山温泉を詠じ、自身の「三冬枯木身」を揶揄したのである。

3. 温泉地における景徐周麟の見聞

景徐周麟の作品には温泉に関するものが多く、一つの作品群をなしている。ここで、『翰林葫蘆集』における明応二年（1493）の温泉十題を例にしてみよう。詩題はそれぞれ異なるが、内容的に湯山における見聞や感想などが綴り、豊富な観念的世界も呈している。「馬耳山」「有馬皆山借欲騎 行人脚力已疲時東坡題

後休題取 盈耳孤雲落日詩」では、北宋・蘇軾の詩「再過超然台贈太守霍翔」における「孤雲落日在馬耳」の句で描かれた中国にある馬耳山のイメージを借りて湯山の夕暮れの景色を描いた作品だと想定できる。そして、「瀑泉」という詩では、景徐周麟は目の前の瀑布を見つ、「徐老惡詩洗何盡、三千尺水未爲多」と当時五山禅林によく見られる中国の廬山にまつわる「徐凝惡詩」の典故を想起している。また、「鹽井」という詩では、景徐周麟は「王莽井」と「武侯鹽」の典故を想起している。一方、「今見輪扁斷輪」詩や「竹筧二升水」には当時の温泉水を輸送する施設の描写も見られる。

4. 景徐周麟の湯治による「洗心」と隠逸、悟道

景徐周麟の詩「比藥樹照肝肺」には、「曉掬温泉洗臟時」という句があり、彼の温泉入浴は湯治だけではなく、身を清める目的もあると表明した。「湯山聯句」にも、温泉による「洗心」の主旨が貫いていることがわかる。このように、彼の作品からは温泉地を特別な世界と見なし、自らの世界観や人生観を託しているのが窺える。

「湯山聯句」には、たびたび当時険悪な世相を言及した句があるが、それに対して、温泉地は神仙の世界、そして隠遁の地である。例えば、彼の文「寄小倉居士」では、湯山で出会った小倉居士との対談において「方今日本國、非君子之可居之國也」と、当時の世相を批判している。そして、明応2年の作「鷄栖舍」「鷄栖其舍滿山隅 誰是舜徒誰跖徒 虵髮客僧借坐坐 被人畫作鳥窠圖」のように、孟子による「舜徒」と「跖徒」の対照及び唐代の鳥窠道林禅師のイメージを借りて隠遁と悟道の志向を表明するような作品も少なくない。

5. おわりに

景徐周麟は湯山湯治とともに、文学作品を多く作り、温泉文学という一大主題の作品群をなしている。これらの作品から、彼の湯山において湯治を行った時期の行状、湯山温泉地での見聞と観念的世界の展開による感想、さらに、温泉地を険悪な世相を離れる隠遁地を見なす態度が読み取れ、その隠遁の志向や悟道精神が読み取れる

*本論文における景徐周麟の詩文は上村観光編、景徐周麟『翰林葫蘆集』（『五山文学全集』、思文閣、一九九二年）による。